

■発行／南方熊楠顕彰会 〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町36番地 TEL0739-26-9909 FAX0739-26-9913
http://www.minakata.org/ 〈E-mail〉 minakata@mb.aikis.or.jp

自筆資料に見る南方熊楠…………… 24

猪稿をめぐる書き込み二題

文／小峯 和明（立教大学名誉教授）

南方熊楠の代表作「十二支考」の元となる、雑誌『太陽』の連載の挿尾が「猪に関する民俗と伝説」である(以下、「猪稿」)。1923年1、4、6、11月と4回にわたって書き継がれた。後半になるとネタが尽きたのか、かなり脱線が多くなり、例によって性的な話題も多くなるが、中でも連載第3回(6月)に、その年の1月に亡くなった高野山の土宜法龍の連想から熊楠が「女の方は如何」と問われ、「生れかつて女に構わぬ」と応えると事実かと反問され、その問いかけ自体に憤慨、ロンドン投宿での体験や妻の松枝とのいきさつや「破れ鍋どころか完璧だった」とその人柄にもふれるくだりがある。これに関して、熊楠所持『太陽』の当該の欄外に以下のような自筆の書き込みがみられる(現、南方熊楠顕彰館所蔵)。

此所六大新報

二転載

高野坊主も

大悦ノ由

本文の「今人天の師と仰がるる土宜師」が「みだりに予の童身を疑うは、高僧果たして娼婦にしかず」に対応するものの、この書き込みの事情が分かりにくかったが、「猪稿」と同年11月17日～20日の『大阪毎日新聞』に熊楠が寄稿した「防火樹」に関連の記事があることが分かった。

今年六月の「太陽」に、予一生女犯せぬ素志だった處、土宜法龍僧正の問條が気に入らず、廓然大悟して妻を持つに及んだ始末を書いたのをかの山の僧侶雀躍して「六大週報」へ転載し、南方菩薩にしてなほこの行ひあり、吾れ々々は是非秘密相経の本文に違はず、金剛杵を以て彼の清浄蓮華を打ち二種の清浄乳相を成就して二大菩薩を生じ諸仏最勝業を施作せにや成らぬと、かの方へ奮進しおる由だが高野禎の効用杯は誰一人気付く者なきは残念で有る。

(『全集』6巻・224頁、表記は『大阪毎日新聞』に拠る)

関東大震災などをうけた防火樹をめぐる高野禎こそ効果絶大であることを力説する一節で、高野山と言えば、と連想が及んだものである。ここで引かれる『六大新報』だが、『大阪毎日新聞』もそれに拠る『南方熊楠全集』も『六大週報』になっていて該当する誌名は不明。熊楠の書き込みの筆蹟は「週」とは読みにくく、「新」が妥当と思われる。『六大週報』は『六大新報』の誤読ではないかと思われる。後者であれば真言宗伝灯会の機関誌で、前身は『伝燈』(1890年創刊)、第1号の主筆は和田大円(与謝野鉄幹の実兄)、2号から土宜法龍が継いで2年間担当し、その後1903年に『六大新報』に改題、京都の六大新報社で刊行され、今日にも及ぶ。月3回の旬刊で日本最古の宗教新聞とされる。おそらく『大阪毎日新聞』が熊楠の筆蹟「新報」を「週報」(昭和10年代の時局誌に『週報』あり)と誤読し、『全集』にもそのまま踏襲されたのであろう。

「防火樹」の論は樹木の深い知識とそれに応じた現地での地道な調査が肝要とし、「古伝の正しさは書籍や都会よりも田舎の山野に就いて掘り出すに限る」と主張、功利に走る行政を批判する。環境学に照らしても有益な論考といえる。

右の例は猪とは直接縁がなかったが、もう一例みておこう。『太陽』連載から3年後の1926年11月に花祭研究で有名な早川孝太郎の『猪・鹿・狸』が公刊(郷土研究社)。初版本が顕彰館に現蔵されるが、熊楠がいつ読んだかは不明である。早川は1932年11月22日に熊楠邸を訪れている(11月30日の来簡もあり)。その折りだとすると猪稿から9年後になる。当書は奥三河の近在の獺師達から猪、鹿、狸の生態や人との関わり、その地に生きる人々の姿を聞き取って自在に語る、味わい深

い作である(講談社学術文庫本にも収録)。猪の章の第9「猪の跡」で猪が作った寝床の力りについてふれる。

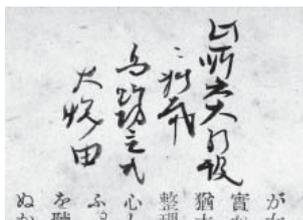
地面を長方形に穿つて、その中にはゴ(落葉)や枯草を敷き、上には稍丈の長い萱の類を橋渡しに覆つてあつた。出入りは一方の端からするとも謂うた。(31頁)

熊楠はこの部分について、以下のメモを欄外に書き込んでいる。

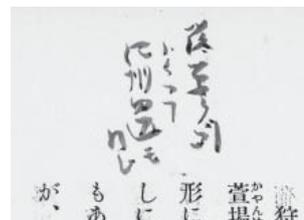
落葉ヲゴ
トイフコト
紀州田辺モ
同ジ

落葉の呼び方が奥三河と同じ「ゴ」であることをメモしたもので、地域の言語に敏感な熊楠の感性がよくうかがえる。猪の考証には欠かさない著書であるはずだが、『太陽』連載の猪稿への追記など、すり合わせはほとんど見られない。この一節は、熊楠も円山応挙の臥す猪を実見して描く逸話でふれる猪の寝床をめぐる着目すべき箇所、古典和歌の歌語にもなり、『徒然草』でも優雅な言葉として引かれる、まさに「臥す猪の床」である。しかし、熊楠の反応は「落葉」の呼称に止まる。

熊楠はこの早川の著書をどう読んだのか。年時のへだたりで関心がうつろったのであろうか。早川の本が熊楠の『太陽』連載に先んじて刊行され、熊楠が読んでいたらどうであったか。「猪稿」はもっと内容が変わっていたか、少なくとも叙述の脱線はより減っていたのではないかと夢想するが、もはや見果てぬ夢である。



【図1】「猪」に関する伝説と民俗連載第3回140頁の書き込み [和誌129]



【図2】早川孝太郎『猪・鹿・狸』(郷土研究社、1926年刊)31頁の書き込み [和誌374.03]

CONTENTS

第29回南方熊楠賞 受賞者決まる	…2
第41回 熊楠をもっと知ろう! 講演会	平川 恵美子 …3
第41回 熊楠をもっと知ろう! 講演会	安田 忠典 …5
第41回 熊楠をもっと知ろう! 講演会	岩崎 仁 …9
第41回 熊楠をもっと知ろう! 講演会	細矢 剛 …12
第41回 熊楠をもっと知ろう! 講演会	萩原 博光 …15
第4回 南方熊楠研究会夏期例会	武内 善信・畔上 直樹 揚妻 直樹・湯本 貴和 …19
熊楠の進講	萩原 博光 …40
新資料紹介「宇井縫蔵受信書簡2点」	田村 義也 …44
南方を訪ねて in 京都・高山寺 報告	長瀬 雅春・小田 龍哉 …48
書評・新刊紹介	亀山 隆彦・小門 穂 …51
書簡の杜(二十)	岸本 昌也 …54
南方熊楠と同級生たち	郷岡 秀夫 …56
「熊楠」生物覚え書 ㉗	土永 知子 …58
南方熊楠研究会 年次大会開催について	…59